

15世紀イングランドのキャロルにみる 既婚女性のイメージ

Images of women, as portrayed by 15th century carols

上野 未央

The imagery of secular women, as depicted in carol texts, is the main focus of this paper. I shall consider the carols found in Bodleian MS. Eng. poet. e.1 (or 'e.1')—a 15th Century manuscript kept at the University of Oxford. Collected during the late 15th century, e.1 consists of 72 carols and 4 Latin poems. Twelve of these carols depict secular women, and in satirical carols women are the most frequently occurring characters.

Moreover, 'married women' are the main targets of satirical carols about women in e.1, and not 'maidens' or 'widows'. They are portrayed as domineering, and are criticised for attempting to challenge established gender statuses. Thus, we may conclude that the imagery of women in e.1 reflects the original owner's intention to protect established medieval values, in which people are discouraged from seeking to alter their social and gender status.

Key words: Carols 15th century England Imagery of women

本稿では15世紀後半の写本、オックスフォード大学ボードリアン図書館所蔵 MS. Eng. poet. e.1 (e.1写本と略記)に収められた女性風刺キャロルの分析を行う。キャロルは、中世後期に登場した俗語歌謡の一種で、聖職者や世俗の歌手により歌われたと推察されてきている。e.1写本は、72篇のキャロルと4篇のラテン詩を収めるが、うち12篇で女性が描かれ、最も頻繁に風刺対象となった。

e.1写本においては、女性の中でも既婚女性というカテゴリーに風刺対象が限定され、彼女たちの、夫より優位に立とうとする行動が非難された。他の風刺キャロルと比較すると、e.1写本では立場の逆転を戒める際に既婚女性というカテゴリーが用いられたと推察できる。e.1写本の既婚女性のイメージには、人々が既定の社会的地位を越えることは想定されていなかった、中世の価値観を守ろうとした原所有者の意図が反映されているのではないかと。

キーワード: キャロル 15世紀イングランド 女性イメージ

はじめに¹

本稿では、15世紀の一写本に収められたキャロル群に描かれた女性像の分析を行う。その分析を通じ、写本の原所有者が、どのような女性のイメージを写本に取り入れたのかという点について、推察をこころみたい。

キャロルとは、中世において俗語であった英語で書かれた押韻詩の一種で、英文学史上、15世紀の英詩の発展を特徴付ける文学形式として位置付けられる²。キャロルに関する主要研究としては、英文学者 R.L. グリーンの *The Early English Carols* が挙げられる。グリーンはこの著作で14~16世紀の約100の写本群に残る500篇近くのキャロルに詳細な註を付けた³。これら現存するキャロルの大半は、他の文学作品や聖職者の説教等と共に写本に収められており、キャロルのみを収集した写本はほとんど現存していない。また、キャロルが収められた写本群のうち来歴が判明しているものの多くは、修道院や修道士個人が所有していたとされる。キャロルの使用に関しては、聖職者や俗人の歌手が、余興や説教の一部として歌ったと推察されてきている⁴。

本稿では、キャロルを収集した写本、オックスフォード大学ボードリアン図書館所蔵 MS. English poetry e.1⁵ (以後 e.1写本と略記)を主要史料として用いる。e.1写本は15世紀後半に作成されたと推定される写本で、キャロルを72篇、ラテン詩を4篇収める。同写本は、キャロルがまとめて収集され、他の写本群と共有するキャロルを多く収める点で、同時代の他写本群とは一線を画す。このよ

うな特徴を持つことから、当該写本はキャロルをまとめて考察するのに適した史料であると考えられる。

しかし、来歴が不明であるために、e.1写本はこれまで歴史学の史料としてはほとんど用いられてこなかった。そのため、筆者はテキスト分析の前提的研究として、史料批判を行った。その結果、当該写本は15世紀に書写されたキャロルが、のちにまとめられたものではなく、15世紀の時点でキャロルが書写・収集され、現在の形に近いものにまとめられた可能性が高いことが明らかになった。また、ラテン詩を収めていることから、当該写本の原所有者は聖職者であったと考えられる。類似の写本群の来歴から考えても原所有者が聖職者であった可能性が高い⁶。本稿では、当該写本の原所有者について考察を深めるため、キャロルのテキスト分析を行う。

当該写本のキャロルに関しては、主に英文学の分野で、テキストの解読・分析が行われてきた⁷。しかし、用いられた語句の文学的背景や、一篇ごとのキャロルの英文学史上の位置付け等に関心が集中した結果、キャロルを収集した人物である写本の原所有者に関心が払われることは少なかった。そのため写本の構成要素としてのキャロルを、まとめて分析することはほとんど行われてきていない。本稿では、英文学研究におけるテキスト分析の成果を取り入れつつ、e.1写本のキャロル群に、まとまった特徴が見出せるかどうかを考察したい。そのような考察により、e.1写本の原所有者がどのような意図でキャロルを収集したのか推察することが可能になるのではないかと。本稿では特に、当該写本に風刺対象としては最も頻繁に描かれた世俗の女性像を分析対象とする。

第一に、e.1写本のキャロルに見る、世俗の女性の3区分について述べる。第二に、風刺対象として多くのキャロルで描かれた、既婚女性のイメージを、やや詳しく見ていく。最後に、e.1写本における女性風刺以外の風刺キャロルについて、女性風刺との相違点を明らかにする。以上の分析を通じ、e.1写本における女性風刺キャロル群の特徴を明らかにしたうえで、写本の原所有者の意図について考察したい。

1. e.1写本のキャロルにおける、女性の区分

e.1写本の72篇のキャロルのうち、聖書に題材を得た34篇に次いで多いのが、風刺・宗教的教訓を歌ったキャロルであり、29篇収められている。世俗の女性は、そのうち12篇で描かれており、風刺対象として最も頻りに描かれている⁹。一方で、e.1写本中、賛美・崇敬の対象として、聖母マリアに言及したキャロルは、全キャロルの半数近くにのぼる。本稿では、e.1写本の聖母マリア像は分析対象としなが、写本の原所有者が、聖母マリア賛美のキャロルと、世俗の女性を風刺するキャロルを、どちらも数多く収集したことには留意しておきたい。

世俗の女性も、e.1写本のキャロルにおいては区分されたと考えられる。たとえば、独身の若い男性が主人公のキャロルでは、既婚女性と未婚女性とを次のように区別している。

*ア、ア、ア、ア。私はどこへ行っても、行った場所を愛する

[1] この世で独身生活ほど楽しいものはない／妻のない若い男ほど楽しいものはない／彼は争いのない生活を送ることができる／彼の行く、あらゆる場所で／*

[2] あらゆる場所で彼は皆に愛される／様々な乙女たちに／踊り、バグパイプを吹き、そしてゲーム⁹をする／彼の行く、あらゆる場所で／*

[3] 彼女たちは結婚している男たちにはほとんど興味が無い／彼女たちがゲームをする時には／彼女たちはその愛を、若い男に向けての／彼女たちが行く、あらゆる場所で／*

[4] そして乙女たちは言う、「さよならジャック／私たちの愛はあなたの鞆に詰められて／あなたはその愛を背負って行く／あなたの行く、あらゆる場所へ」／*¹⁰

このキャロルでは第1節で、妻のない (without wife) 男は争いのない (without strife) 生活を送ることができるとされたのに対し、第2節以降は若い男が乙女に愛されることは良いこととして描かれている。このような、既婚、未婚という区分に、寡婦を加えた女性の3区分は聖書に起源を持ち¹¹、中世において広く知られたものであったと言われる。3者の中では、乙女が最も優位にあり、寡婦はそれに準じ、既婚女性が最も劣るとされた¹²。e.1写本の原所有者も、この区分を念頭に置いていたと考えられるが、当該写本中のキャロルには、寡婦は全く登場しないし、乙女に言及したキャロルもほとんどない。それに対して、既婚女性 (wife) は、女性が描かれたキャロル12篇のうち、9篇において言及され、風刺対象となっている¹³。e.1写本のキャロルにおいては、世俗の女性の中でも特に、「既婚女性」というカテゴリーに風刺対象が限定されたと考えられる¹⁴。

またe.1写本には、母としての世俗の女性を描いたキャロルは全く収められていない。既婚女性は妻としてのみ描かれ、母として描かれることはなかったのである。一方で、先述のように、e.1写本のキャロルにおいて母・乙女として賛美・崇敬の対象となったのは、聖母マリアであった。e.1写本に収められた、女性に言及したキャロルをまとめて見ると、妻としての既婚女性と、母・乙女とし

ての聖母マリアというように、女性のカテゴリー分けされて、キャロルが収集されたと考えることもできるのではないかと。

それでは、e.1写本のキャロルにおいては「既婚女性」というカテゴリーが用いられた場合、何が風刺されたのだろうか。以下、e.1写本における既婚女性像をやや詳しく見ていく。

2. キャロルに描かれた既婚女性の行動パターン

①暴力による立場の逆転

e.1写本のキャロルにおける女性風刺の特徴として、第一に挙げられるのは、家庭内での暴力による男女の立場の逆転である。たとえば、夫婦の争いが以下のように描かれた。

*ヘイホー、あわれな男たちよ。神はあなた方を助けてくれる。

[1] ある日争いが起こった、年老いた男と彼の妻の間で／彼女は彼の髭をたいそう強く引っ張った／*

[2] 彼女は彼の髭をたいそう強く引っ張った／そのために彼の両目から涙があふれ出た／*

[3] 扉の外へ／彼は出て行った／そして隣人に会った／お隣さん、なぜ泣いているの／*

[4] 私の家には煙が満ちている／あなたも入ってごらん、きっと泣くだろう／*¹⁵

このキャロルに描かれた光景は、女性は男性に従属するものとした中世の聖職者の女性観に照らし合わせると、明らかな立場の逆転である。

中世の聖職者の女性観は、聖パウロによる「すべて男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、男は女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのである¹⁶」という言葉に象徴されるように、女性は男性より劣るとする女性観であった。この女性イメージは『創世記』のイヴ (エヴァ) に起源をもち、イヴの末裔である全ての女性は、魂が不完全で、誘惑に弱く、言葉を操ることができない、といった否定的イメージが存在した¹⁷。引用したキャロルでは、このような立場の逆転が、既婚女性の暴力によって起こるさまが描かれている¹⁸。さらに、「あわれな男たちよ、神はあなた方を助けてくれる」というフレーズを各節の終わりに挿入することで、男女の立場の逆転に対する否定的見解が示されていると解釈できるのではないかと。次のキャロルでは、立場の逆転に対する警告が、より明確なメッセージとなっていると思われる。

*気をつけて行け、気をつけて。いつでも、気をつけて行け。

[1] 私が苦勞して働いて、汗をかくのは全て／飲み食いする妻のため／私がもし何か言ったら、彼女は私を殴るだろう／だから私の心はいつも悲しい／*

[2] もし私が彼女に対して、良いこと以外のことを言ったら／彼女は気が狂ったかのように私を見つめるだろう／そして私の頭を殴るだろう／だから私の心はいつも悲しい／*

[3] もし彼女が強いエールを飲みたがったら／私は彼女の側までそれを運ばなくてはならない／そして彼女が飲む間、私は我慢しなくてはいけない／だから私の心はいつも悲しい／*

[4] もし私が「これはこのようにすべきだ」と言ったら／彼女は言うだろう「あなたは嘘をついている、無作法な男、本当に／あなたが私に勝つことができるというの？」／だから私の心はいつも悲しい／*

[5] もしこのような妻を持つ男がいたら／彼は使徒信条にある審判がどのように現れるのか知ることになるだろう／彼の苦行に対し、神は報いてくださるだろう／だから私の心はいつも

悲しい¹⁹／*²⁰

このキャロルでは、最終節において、家庭内における立場の逆転の結果が、最後の審判において現れるだろうと語られる。e.1写本では、他にも、妻に罵にかけられた男を主人公にしたキャロルにおいて、一種の暴力による男女の立場の逆転が主題となっている。

②飲酒

次に、e.1写本のキャロルにおける既婚女性の行動の特徴的なものとして、飲酒が挙げられる。先に引用した「私が苦勞して働いて、汗をかくのは全て」と始まるキャロルにおいては、妻は夫に暴力を振るうだけでなく、夫の金を使って飲み食いをして、第3節においては強いエールを飲んでいる。

また、e.1写本には既婚女性が居酒屋に集う様子を描いたキャロルが収められている。このキャロルで、女性たちは「鞭打ちの一つか二つ／神は私に報いるかもしれない／もし私の夫がここで私を見たならば（8節）」と言いながらも「神がもっと送って下さるまで、私たちはお金を使う（9節）」と宣言する。そして、夫について「とてもひどくて／彼は私を、地獄の悪魔のように殴る／泣けば泣くほど、容赦ない（14節）」と言い、そのような夫には、神は短い人生しか与えないだろうと語り合う。続けて女性たちは次のように語る。

[19] さあ私たちの杯を置いて、行こう／何ですって。1人につき3ペンスですって／すみませんが、これは少ない出費です／こんなに楽しい集いのためには

[20] やってきた道を下り／私たちはそれぞれの道へ別れる／アンが言うには「仲間たち（Gossips）よ、疑う必要はない／夫は喜ぶ、あなたたちが帰ったら」

[21] どんなことを男たちが語ろうと／私たちは飲みに行くのをやめはしない／さあ早く行こう／どこにいたか、見られるかもしれないから

一見するとこのキャロルは、女性の視点から描かれた飲酒の楽しみを歌うキャロルとしても解釈できそうである。しかし、これは、飲酒し夫の悪口を言う妻を風刺したキャロルであることが、男性の語り手による以下の結末により明らかとなる。

[23] 誰が、こんな話はないと言ったのか、女たちよ／これは確かに本当のことである。あなた方も知るだろう／だから、私たちも皆、飲もう／そして私たちの歌に良い結末をつけよう

[24] さあ杯を満たせ、そして私のために飲んでくれ／私たちはよい仲間（fellow）になろう／そしてこの話はもうやめよう／今度は女の美点について語ろう²¹

このキャロルでは、悪口という意を持つ言葉 gossip で表現された既婚女性の仲間と、fellow と表現された男性の仲間とが対比的に描かれ、ジェンダーによる対立軸が明確化されていると考えられる。また、このキャロルでは、既婚女性たちは夫に隠れて飲酒をし、夫の悪口を言いあっている。夫との関係において女性が非難されるという点では、暴力による立場の逆転を風刺したキャロルと類似するといえよう。

飲酒する女性の姿は、中世末期イングランドにおいて、地獄を描いた図像中に、貪欲の罪の象徴としてしばしば描かれるものであった。たとえば、サフォークのバクトンの教区教会の壁画には、飲酒にふける妻（Alewife）がマグカップを手に持ち、悪魔に一杯勧めている様子が描かれた²²。類似の図像が、15・16世紀の約10の教区教会に残る壁画に描かれている²³。チェスターの聖史劇でも、飲酒す

る妻が地獄へ落ちる場面が描かれた²⁴。

貪欲の罪の象徴として描かれた飲酒する妻と、引用したe.1写本のキャロルで描かれた飲酒する既婚女性は、イメージとしては類似するといえよう。しかし、e.1写本のキャロル中では女性の飲酒は、地獄と直接的には結び付けられていない。e.1写本の女性風刺キャロルにおいては、既婚女性の飲酒は、立場をわきまえない行動の象徴として描かれているのではないかと。そして、先に引用した「私が苦勞して働いて、汗をかくのは全て」と始まるキャロルの内容と重ね合わせると、飲酒に象徴される、中世の女性の身分をわきまえない行動が、e.1写本のキャロルにおいては地獄へ結びつくものとされたのではないかと。

③饒舌であること

上に引用した女性の飲酒を歌ったキャロルにおいては、悪口を言うこと、饒舌であることが、既婚女性の欠点の一つとして付け加えられた。女性が言葉を操ることへの非難は、次のキャロルでは、以下のように歌われている。

*最近、こんなことを見たことがあるか／家の主人がズボンをはいていない

[1] イングランドでは毎日、信じられないことが起こる／結婚した人々の間にその根がある／どんな知識をもってしても表現しつくせない／どんなペンも全てを記すことができない／女性が彼らを支配している／彼女たちは自分たちのためにはたくさん取る／そのために、家の主人がズボンをはいていない

[2] イヴがアダムの肋骨から創られた時から／この土地でそんな事（news）は起こり得なかった／厳格さと自尊心を持った男性が／女性と口論して負けている／そして彼らの勇気は捨てられた／だから、これは言い過ぎではない／家の主人がズボンをはいていないようなことが起きないように（しなさい）²⁵（以下略）

ここで「家の主人がズボンをはく」という表現は、「家を支配する」と同義で用いられていると考えられる。この表現は、中世ヨーロッパにおいて、聖職者の説教に用いられ、教会のミゼリコルドにも描かれた、ズボンを巡る男女の争いに関係があると思われる²⁶。そして、引用したe.1写本のキャロルでは、女性と口論して負けることが、「家の主人がズボンをはいていない」という家庭内での立場の逆転につながるものとして描かれている。また、e.1写本の他のキャロルでは、「多くの男は妻を責めるが、男性の方がもっと悪い」という言葉に反論するかたちで、次のように語られる。

[4] 私が見たあらゆる場所で／全ての女性の舌が縛られているわけではなかった／そして、そのように見えるのなら、彼女らは偽っている²⁷

このキャロルでは、続いて、第5節で「夫が彼女たちを支配していても、彼女たちは狡賢く立ち回る」と述べ、第8節では「彼女たちが死んだら、心臓が破裂するだろう、だから彼女たちを悪魔のもとへ行かせよう」と歌う。

饒舌な女性に対する批判は、中世後期イングランドの教区教会に描かれた壁画・ステンドグラス等にも、しばしば見られる。たとえば、ノーサンプトンシャー（現ケンブリッジシャー）、ピーカークの壁画には、おしゃべりをする2人の女性の肩を悪魔が掴んでいる様子が描かれている²⁸。彼女たちの足元には、教会で用いるはずのロザリオが置かれている。教会にこのような図像を配置したのは、それを見る人々に、教会内でミサ中に無駄話をすることを戒めるた

めであったと考えられている²⁹。

しかし、e.1写本のキャロルでは、妻たちは教会の外で言葉を操っている。また、彼女達は、単に駄弁を弄するのではなく、男性と口論したり、夫の悪口を言ったりするのである。e.1写本においては、男女の立場を逆転させようとする行為としての女性の饒舌さが非難されたのではない。

以上、e.1写本の女性風刺キャロル群では、既婚女性というカテゴリーが主たる批判対象となることで、ジェンダーによる対立軸が明確化されたと言えるのではない。さらに、e.1写本のキャロルでは、女性が飲酒する、暴力をふるう、悪口を言う等の行為は、ほとんどの場合、男女の立場の逆転と結び付けられていると言えよう。

一方で、e.1写本に描かれなかった女性像として、中世において、聖職者の女性イメージの典型の一つであった、男性を誘惑する女性像がある。たとえば、中世の壁画、ステンドグラス、木版画等に図像化された『創世記』のアダムとイヴの間には、木の上でイヴを誘惑する蛇が描かれているが、しばしばこの蛇は女性として擬人化された³⁰。また7つの大罪や、地獄での責め苦を描いた図像でも、肉欲の罪を象徴するのは女性であることが多かった³¹。14世紀の*Handlyng Synne* においては、女性が教会の内陣へ入ることを禁じる理由として、聖職者が誘惑されてしまう危険性が挙げられた³²。しかしながら、e.1写本には、男性を誘惑する女性像が全く描かれなかった。その理由として、男性を誘惑する女性像が、立場の逆転という主題にはなじまないものであったからとは考えられないだろうか。つまり、e.1写本のキャロルにおいて既婚女性というカテゴリーが用いられた際には、主として、立場をわきまえない行為への戒めが主題とされたのではない。以下、e.1写本に収められた他の風刺キャロルを見ていくことで、女性風刺の特徴を明確化した。

3. e.1写本におけるその他の風刺キャロル

e.1写本には、既婚女性という、女性の一カテゴリーに風刺対象を絞ったキャロルの他にも、風刺キャロルが何篇が収められている。それらの風刺キャロルでは、ジェンダーによる対立軸は用いられていない。

e.1写本においては、複数のキャロルで、女性風刺キャロルで描かれた女性の行動と同じ行動をとった男性が、風刺対象となった。たとえば、先に引用した女性風刺キャロルには、エールを飲む既婚女性が描かれていたが、e.1写本にはエールを飲む男性への警告を歌ったキャロルも収められた。以下はその冒頭2節である。

*気をつける、気をつける、エールに気をつける／エールは多くの男を愚かにする

[1] エールのために多くの男が問題を起こす／エールのために多くの男が泥の中で眠る／エールのために多くの男が火のそばで眠る／*

[2] エールのために多くの男が石につまずく／エールのために多くの男が酔っ払って家に帰る／エールのために多くの男が妻を殴る／*³³ (以下略)

以下第6節まで、飲酒が引き起こす悪い結果が列挙され、注意が促されている。先に見た女性風刺キャロルにおいては、女性の飲酒が引き起こす、家庭内での立場の逆転が主題であったのに対し、ここでは飲酒という行為そのものへの警告が主題となっている。

また、悪口を言うこと、饒舌であることへの批判も、男性に対して行われることがあった。以下は、中世の他の写本に残るキャロル

でもしばしば歌われ、e.1写本では3篇のキャロルで主題となった、悪い舌 (evil tongue) について歌うキャロルである。

*舌を動かす男／彼は、どこに行こうが、それを気にしない

[1] あらゆる場所で知られている／悪い舌に等しいものはないと／それらは火の中で燃されるだろう／*

[2] ある人が、きれいな服を着ていたら／あるいは良い格好をしていたら／悪い舌は言うだろう／あなたはどこへ行こうというのか／*

[3] ある人が、貧しいなりでいて／望み通りの世界に生きていなかったら／悪い舌は、彼にひどいことを言うだろう／そして言うだろう、彼はよろよろ歩いている、彼を追い払え／*

[4] 今、我らは悔い改めよう／懺悔し、美德を持とう／そうすれば我々は神の力を見るだろう／アーメン、アーメン、慈悲深い神よ／*³⁴

また、別のキャロルでは、「全ての敵の中で／舌が、人間 (mankind) にとって最もひどい敵である³⁵」と歌われる。これらのキャロルでは、悪口を言うという行為そのものが非難されている³⁶。e.1写本には他にも「口を慎みなさい」と歌うキャロルが複数収められている³⁷。e.1写本においては、立場の逆転を戒める場合は既婚女性という女性の一カテゴリーが用いられたが、飲酒や他人の悪口を言うという、行為そのものを戒める場合には、ジェンダーの対立軸は用いられなかったと言えるのではない。

また、e.1写本には、特定の人々を風刺対象にしたキャロルも収められた。たとえば、遺言執行人は、複数のキャロルで「信用ならない」として非難の対象となった。さらに、「何もなくて神だけだった時」と始まるキャロルにおいては、三位一体や天地創造、奇跡に関する疑問が列挙され、そのような疑問を抱くこと自体が愚かであると歌われた。このキャロルの第6節では、異端への反感が、次のように描かれた。

[6] 異端たちはこのことを最も疑問視する／どのようにして、聖体が／ここでもローマでも、そしてどこでも、存在するのか／なぜ、なぜ、このなぜとは何だ／そんなことを尋ねることが愚かである／神の言葉の力ほど／確かなものはない³⁸

ここでは、聖餐の奇跡を疑問視する異端が非難されている³⁹。また「悪がはびこり、美德が衰退している」と始まるキャロルにおいては、「全ての少年が騎士の真似事をする」ことが非難されている。「騎士の真似事をする」ことが何を指すのかは不明であるが、このキャロルには、中世の既定の身分を越えようと試みることへの非難が込められているのかもしれない。e.1写本には、他に、宗教的教訓を歌うキャロルが複数収められている。

これらのことから、e.1写本は中世の価値観を守ろうとする意図が反映されたキャロルを多く収めた写本であると考えられる。女性風刺キャロルも、単なる聖職者の女性嫌悪の現れとしてだけでなく、このような文脈の中で捉えなおされるべきではなからうか。e.1写本の原所有者は既婚女性というフィルターを通して、女性だけでなく、男性に対しても、身分をわきまえない行為を戒めようとしたのかもしれない。

むすびにかえて

以上、15世紀後半に作成された写本に収められたキャロルのテキスト分析を、世俗の女性像に着目して行った。その結果、まず、e.1

写本においては、女性の中でも特に「既婚女性」というカテゴリーに風刺対象が絞られていると推察した。また、e.1写本のキャロルの多くで、既婚女性は夫より優位に立つことにより非難されている。このような男女の立場の逆転は、女性による暴力や飲酒、あるいは女性の饒舌さによって引き起こされるのが、e.1写本のキャロルに多く見られるパターンであったと言える。

一方、e.1写本の他の風刺キャロルでは、男性であっても、飲酒や、悪口を言う等の行為は風刺対象となっている。それらのキャロルでは、女性風刺で描かれた「立場の逆転」ではなく、行為そのものへと非難対象が移っていると考えられる。つまり、e.1写本においては、立場の逆転を戒める場合に、既婚女性というカテゴリーが風刺対象として利用されたのではない。

以上のことから、e.1写本における既婚女性のイメージには、人々が既定の社会的地位を越えることは想定していない、中世社会の価値観を守ろうとする、原所有者の意図が反映されているのではないだろうか。中世社会の価値観を守ろうとする姿勢は、e.1写本に収められた他のキャロルにも見られる傾向である⁴⁰。この推察は、原所有者を聖職者と推察した史料学的分析の結果にも合うものである。また、e.1写本では、既婚女性というカテゴリーは、中世的価値観の転覆を戒める際に便利であったために、風刺対象として用いられたに過ぎないと考えられる。したがって、e.1写本に描かれた既婚女性のイメージは、現実を反映したものではないということを、指摘しておきたい。

さらに、e.1写本には、中世において崇敬対象として人気のあった聖母マリアも頻繁に描かれている。e.1写本の原所有者にとっての女性観は、本稿で取り上げた世俗の女性像と、聖母マリア像とを重ね合わせることで、初めて明確化できるのではないかと。マリアのイメージと世俗の女性のイメージとの関わりについての考察は、次稿に譲ることとする。

1 【凡例】1. キャロルの邦訳は筆者による試訳である。2. キャロル引用に際し、以下の略号を用いる。*はバーデン（キャロルの冒頭部分、節の終わりに繰り返されることが多い）、[]内の数字は節番号を示す。写本中では、押韻を結ぶ線が引かれ節の明示がなされた。3. f. はフォリオ、rはフォリオ表、vはフォリオ裏の略。
2 R.T. Davis (ed.), *Medieval English Lyrics*, London, 1963, p. 35 ; T. Duncan (ed.), *Late Medieval English Lyrics and Carols 1400-1530*, London and New York, 2000, p. xxxiv.
3 R. L. Greene, *The Early English Carols*, 2nd ed., Oxford, 1977 (以下 Greene, *Carols* と略記)。現在でもキャロル研究はおおむね、このグリーンの研究に依拠している。
4 *Ibid.*, pp. xxxiii-xlii.
5 ボードリアン図書館所蔵写本のカatalogueでは MS. Eng. poet. e. 1と表記される。F. Madan, H. H. I. Craster, and N. Denholm-Young, *A Summary Catalogue of Western Manuscripts in the Bodleian Library*, Oxford, 1895-1953 (No. 29734).
6 当該写本のキャロルの聴衆としては俗人が想定されていた可能性がある。写本中の、ラテン詩を取めた部分とキャロルを取めた部分とに、異なった書写スタイルが適用されたことが、複数の編集意図の存在を示唆するためである。さらに、世俗の人々を主人公にしたキャロルが写本全体の約3分の1収められたことも、キャロルが世俗向けであった可能性を示すといえるかもしれない。拙稿「十五世紀イングランドのキャロル写本 MS. Eng. poet. e. 1に関する史料論的分析」『お茶の水史学』47 (2003年)、1-38頁。
7 当該写本は19世紀に英文学者 T・ライトにより刊行された。T. Wright (ed.), *Songs and Carols now first printed from a manuscript of the fifteenth century*, Percy Society, London, 1847. (以下 Wright, *Songs and Carols* と略記)。その他、当該写本のキャロルのテキスト解説・分析を行った主要研究として以下のものがある。R. H. Robbins, *Secular Lyrics of the 14th and 15th centuries*, Oxford, 1955 ; Greene, *Carols* ; Davis, *Medieval English Lyrics* ; Duncan, *Late Medieval English Lyrics and Carols*.
8 e.1写本は、同時代他写本に比べ女性風刺キャロルを多く収めている。また

当該写本の女性風刺キャロルは同時代の写本群とは全く共有されず、16世紀のロンドン市民リチャード・ヒルのコモンプレイス・ブック (Oxford, Balliol College, MS. 354) と多くを共有する。本稿では15世紀に収集されたキャロルに分析対象を絞るため、16世紀のキャロルは対象としないが、キャロルにおける女性像の変化を知るためには両者の比較が有効であろう。また14世紀に英語で作成されるようになった宮廷風恋愛詩の影響は、e.1写本のキャロルにおける世俗の女性像には見られない。貴族層を主な需要者とした宮廷風恋愛詩と異なり、キャロルがキリスト教の教義を伝えることを目的の一つとしたためかもしれない。

9 原文では 'rennyng (running) at the ball'。グリーンによると 'stool-ball' という男女が共に遊んだ一種のゲーム。Greene, *Carols*, p. 461.
10 e.1写本 f. 23v ; Wright, *Songs and Carols*, p. 27 ; Greene, *Carols*, p. 461 ; Duncan, *Medieval English Lyrics and Carols*, pp. 169-70, 259.
11 コリントの信徒への手紙 1、7章 32-40節。
12 女性の3区分については以下参照。森下園「中世における聖職者の女性信徒観—『マージョリー・ケンプの書』をめぐって—」『紀尾井史学』17 (1997年)、35-48頁、特に37頁。G・デュビイ、M・ペロー監修、杉村和子、志賀亮一監訳『女の歴史II 中世2』藤原書店、1994年、550-551頁。
13 残り3篇のうち2篇は女性の欠点を列挙するもので、女性の既婚・未婚の区別には言及されない。もう1篇のキャロルでは「冬にイラクサが薔薇を咲かせるようなことが起こったら、その時初めて女性を信頼しよう」などと、自然界において起こり得ない出来事が列挙され、そのようなことが起きたら、女性に信頼を置くことができると歌う。つまり女性はそれほど信用できないものだということである。これは、女性風刺であると同時に、e.1写本に収められた、世界の不確かさを不可思議な自然現象の列挙により表現したキャロルと同類のものとしても理解できよう。
14 既婚女性を風刺対象とするのは、同時代他のキャロルや、ジョン・リドゲイドの英詩にもしばしば見られる特徴である。
15 e.1写本、f. 34v ; Wright, *Songs and Carols*, p. 51 ; Greene, *Carols*, p. 458. グリーンによれば「煙が家に満ちている」という男の弁明は中世の諺からきている。
16 コリントの信徒への手紙 1、11章 3, 9節。
17 C. Peters, *Patterns of Piety: Women, Gender and Religion in Late Medieval and Reformation England*, Cambridge, 2003, pp. 130-1 ; 森下園、前掲論文、37頁。木間瀬精三「キリスト教の女性観」聖心女子大学キリスト教文化研究所編『女性と宗教』春秋社、1978年、27-50頁。また、中世イングランドの女性に関しては、以下も参照。三好洋子「イギリス中世における結婚・相続・労働」女性史総合研究会編『日本女性史 第2巻中世』東京大学出版会、1982年、251-87頁。
18 男性の髭を掴む女性の姿は、教会の聖職者席のミゼリコルドに彫られた主題でもあった。ミゼリコルドについては以下参照。G. Grossinger, *The World Upside Down: English Medieval Miscerords*, London, 1997 ; マイケル・カミール著、永澤峻、田中久美子訳『周縁のイメージ：中世美術の境界領域』ありな書房、1999年、117-22頁。
19 「だから私の心はいつも悲しい」というフレーズは、リフレインの一部となっていると思われる。そのため第5節では、このフレーズは、他の部分と意味の上で自然なつながりを持たないであろう。
20 e.1写本、f. 23 ; Wright, *Songs and Carols*, pp. 26-7 ; Greene, *Carols*, p. 457 ; Duncan, *Medieval English Lyrics and Carols*, pp. 167-8, 259.
21 e.1写本、ff. 57v-59v ; Wright, *Songs and Carols*, pp. 91-95 ; Greene, *Carols*, pp. 466-7.
22 Peters, *Patterns of Piety*, p. 144.
23 *Ibid.*, p. 145.
24 Dr. Matthews (ed.), *The Chester Plays*, Early English Text Society (以後 EETS と略記), extra series, No. 115, London, 1916, pp. 329-30.
25 e.1写本、ff. 42v-43r ; Wright, *Songs and Carols*, pp. 88-9 ; Greene, *Carols*, pp. 457-8.
26 ズボンをめぐる男女の争いについては以下参照。ピエール・ビュロー「《ズボンをめぐる争い》—ある世俗的テーマの文学と図像のヴァリエーション (13-16世紀)」徳井淑子編訳『中世衣生活誌—日常風景から想像世界まで』勁草書房、2000年、144-79頁。
27 e.1写本、ff. 54v-55r ; Wright, *Songs and Carols*, pp. 86-7 ; Greene, *Carols*, pp. 458-9.
28 E. C. Rouse, 'Wall Paintings in the Church of St Pega, Peakirk, Northants.', *Archaeological Journal* 110 (1954), pp. 279-80.
29 Peters, *Patterns of Piety*, p. 13. 駄弁を弄する女性像に関して、以下参照。P. Coss, *The Lady in Medieval England 1000-1500*, Stroud, 1998, pp. 153-9.
30 Peters, *Patterns of Piety*, pp. 134-5 ; R. Woolf, *The English Mystery Plays*, London, 1972, p. 115.
31 Peters, *Patterns of Piety*, pp. 146-8.
32 F. J. Furnivall (ed.), *Robert of Brunne's 'Handlyng Synne', Ad 1303 With Those Parts of the French Treatise on which it was Founded*, William of Wad-

- dington's *Manuel des Pechiez*, EETS, original series, Nos. 119 and 123, repr. as one vol. New York, 1973, pp. 277–80 (lines 8809–14, 8881–92).
- 33 e. 1写本, ff. 52r–53v; Wright, *Songs and Carols*, p. 81; Greene, *Carols*, pp. 470–1. なお、e. 1写本には、飲酒の楽しみを歌うキャロルも収められた。飲酒は常に非難の対象であったわけではないようである。
- 34 e. 1写本, ff. 28v–29r; Wright, *Songs and Carols*, pp. 41–2; Greene, *Carols*, p. 433.
- 35 e. 1写本, f. 22r; Wright, *Songs and Carols*, pp. 23–4; Greene, *Carols*, p. 434.
- 36 駄弁を弄することへの非難として、前述のように、無駄話をする女性と悪魔の図像が教会内に描かれたが、15世紀になると、同様の図像に男性が描かれた例が確認できる。R. Marks, *Stained Glass in England during the Middle Ages*, London and Toronto, 1993, p. 81; Peters, *Patterns of Piety*, p. 16, fig. 4.
- 37 必要に応じたジェンダー区分の使い分けは、中世後期のイングランドにおける教会内部の信徒席の分配においても見られる。内陣は教会内で最も神聖な場とされ、東方教会の伝統では、女性信徒の座席は、内陣よりできるだけ遠くに置くべきとされた。しかし中世後期イングランドでは、信徒席の区分は、必ずしもジェンダーに従うものではなかった。たとえばロンドンのセント・メアリ・ウールチャーチで、1457年、教区民たちにより、信徒席を財産によって分類するように決定されていたことが分かっている。ジェンダーによる区分を適用した例としては、1525年、ロンドンのセント・クリストファー・ル・ストック教区教会の教区委員の記録に、「男性は男性の席に、女性は女性の席に」座るように決まっていたとある。また、1459年、ロンドンのセント・マイケル、コーンヒル両教区教会においては、男性用、女性用の信徒席の修理が行われた記録がある。これらの教区では、教区民の社会的地位が多様であったために、ジェンダーによる区分の方が、教区民の区分に便利であった可能性がある。ピーターズも指摘するように、農村部においては、ジェンダーよりも、社会的地位が教区民区分の指標となることもあったかもしれない。中世後期イングランドにおいて、ジェンダーという指標は、必要に応じて用いられると考えられる。Peters, *Patterns of Piety*, pp. 22–24; M. Aston, 'Segregation in Church', in W. J. Shiels and D. Wood (eds.), *Women in the Church*, Studies in Church History 27, Oxford, 1990, pp. 237–94.
- 38 e. 1写本, ff. 24v–25r; Wright, *Songs and Carols*, pp. 30–1; Greene, *Carols*, p. 432; Duncan, *Late Medieval English Lyrics and Carols*, pp. 102, 229–30.
- 39 先行研究で指摘されたように、聖餐の教義に疑問を唱えたウィクリフやローラード派への言及であるかもしれない。Duncan, *Late Medieval English Lyrics and Carols*, p. 229.
- 40 e. 1写本には、このような傾向に沿わないように見えるキャロルも、少数ではあるが、収められている。飲酒・宴会の楽しみや、盲目の男に効く薬の作り方を歌うものなどである。これらのキャロルについても、今後、分析対象としていきたい。